

博士論文（要約）

## 川端康成の文体と身体

—日本語の小説における声の論理の働きをめぐって—

平井 裕香

本論文は、何がいつどのような声で語られているかという、語法をはじめとする文体と人物の身体の表象の双方にかかわる問題に注目することにより、一九二〇年代から六〇年代に発表された川端康成の小説の読み直しを試みた。

第二次世界大戦後、東西冷戦期の日本では、西洋の近代文学、わけでもリアリズム小説との直線距離で、自国の近代文学を評価するという枠組みが大きな力を持っていた。もちろん、そうした枠組みは戦前から存在したが、日本がアメリカを中心とする西側に居場所を得るプロセスで、西洋との対比によって特殊な伝統を有する日本を描き出すような傾向が、強まったと思われる。結果として多くの小説が、作者とその分身である「主人公」や「視点人物」の主観を表現しているという非常に狭い意味において、私小説やそれに類するものとみなされることになった。人物の内面を語ることを、人物の声で語ることと理論的に言い換えて、主人公の声で語られた、もしくはそう読める部分が、作者の声で語られた部分として特権化されたと、考えることもできるだろう。川端康成の小説も、以上の非対称かつステイタックな枠組みのもと、作者と主人公の幻想、すなわち美しい日本やその象徴たる美しい女を描いた作品として、長らく捉えられてきた。

そのような作品のあり方が非難に値することは、フェミニズムやポストコロニアリズムを理論的な背景として、一九八〇年代末から

たびたび剔抉されている。他方で、川端の小説が美しい日本や女を描くだけではないことも、先に述べた受容史と生成の文脈の精査によって、九〇年代後半以降、徐々に明らかにされつつある。本論文は主として後者の立場を引き継ぎつつ、川端文学に備わっている、美しい日本や女の構築性を露呈する側面を浮き彫りにして、前者の批判的立場にも応答することを目指した。そのために焦点を据えたのが、主人公の声だけを特権化しては見えない、多様で時に過剰な声の間の相互作用である。例えば「雪国」冒頭について、原文が「駅長さあん」という葉子の声を描くのに対し、英訳および仏訳は〈葉子が駅長を呼んだ〉という事態の描写に終始する。そうした翻訳前後の違いは、何をいつどのような声で語るかという選択が、言語によって異なった条件のもとでなされると同時に、書き手によって異なった形でなされることを意味する。したがって、その行為の主体を作者と捉えることにより、五〇年代以来の評価を乗り越える読みが可能になると、本論文は考えた。

「はじめに——日本と女の美しさを描いた男性作家を越えて」では、以上の問題意識をまとめ、論文全体の構成を述べた。

総論にあたる第一章「二つの『体』が交わるころ——川端康成の『声の論理』」では、川端の後期の小説に顕著な声の曖昧さが、声の多様さや過剰さとの密接な相互作用において、ある主体の・ある瞬間の認識の否定を核心とするリアリティを生むことを、歴史的かつ理論

的な考察によって推定した。作家の大江健三郎は一九六〇年の時点で、川端康成の「千羽鶴」に、作者と主人公の声の境界の不明瞭さとともに、関係の両義性、つまり両者の声が重なっているともずれているとも読めるという性格を見出していた。大江は、川端がある内容を伝達するためよりも、語る声を切り替えるために言葉を使っている可能性を批判的に指摘するが、言葉が伝える意味の関係、意味の論理と区別して声の論理と呼び得るような、言葉が帯びる声の関係が川端文学においては極めて重要な働きをしていると、捉えることもできるのでないか。そもそも、大江が明らかにした語る声の曖昧さは、おそらく大江の理解に反し、近代初期の日本語の西洋語化とも言うべき変化と深く結びついている。言文一致の成立により、自己の声と人物の声をはっきりと様式的に差異化できなくなった作者は、文末・語末や指示表現、思考主を表す代名詞や人物名の有無を通して、二つの声の間の距離を示すことを余儀なくされた。それに伴う曖昧さを隠蔽するのではなくむしろ、戦間期に隆盛を見たモダニズムの潮流の只中において利用したこと、人物の声と重なっているともずれているとも読める声で、外界のレトリカルな描写やその人物の身体への言及を行なったことこそが、川端文学の特徴である。そして、その文体・身体両面に及ぶ曖昧さは、作者と人物の間の距離が読者と人物の間の距離ともなるということとを踏まえれば、読者と人物の経験が重なってはまたずれるという事態を起こすと考えられ

る。そうした曖昧さを含む声で語られる地の文は、対照的に誰の声で語られているかの明確な、会話部分をはじめとするその他の部分とかかわって、不可逆に流れる時間の中で程度を増す情動、すなわち言語による分節以前の間主観的な身体性を、読者に伝達するだろう。

各論にあたる八章では、川端康成の地の文が以上のような曖昧さを孕むことになった経緯と、ある時は過剰に表象され、ある時は過剰な身体性を負わされる発言、手紙や日記が、その曖昧さとかかわることで生まれるリアリティの質を、具体的な作品の分析によって明らかにした。第二章と第三章では、初期の私小説における、語る自己と語られる自己の曖昧な関係が、他者やかつての自己の言葉と、その言葉の受け手としての自己の身体の表象に、還元不可能な多義性を与えていることを示した。第四章と第五章では、そうした自己の内部における分裂と統一のせめぎ合いが、一九三〇年頃に作者とその他の人物の距離の揺らぎ再編されて、作家が立ち入れない場における、あるいは言葉以外がもたらす情動を伝えることを述べた。第六章と第七章では、そのようにして獲得された曖昧な三人称により、一九三〇年代から五〇年代の代表作が、主人公が作中で他者から受ける呼びかけに、その人物の自覚を越えて応答するような読書を成立させることを論じた。第八章と第九章では、六〇年代の作品が、そうした中期の作品で既に露呈し始めていた主人公の分裂を深

め、読書を通して経験される自他の身体の生々しさや、作中の出来事に対する読者の認識の重層性を増していることを指摘した。

**第二章 「二重化する「私／僕」——「非常」と「処女作の崇り」**では、作者の失恋を題材にした初期の短編小説が、語る自己と語られる自己の間に時間の面で、あるいは語る回路の面で両義的な関係を作り出していることを論じた。「非常」（一九二四）の「私」が恋人の手紙について悩む時点は、手紙を受け取った時点とも小説を書く時点とも確定できなくされている。そうした「私」の二重化により、恋人からの別れの手紙を、かつての自己の解釈の独善性を反省しながら今また解釈し直している、「私」の情動が示されている。他方で「処女作の崇り」（一九二七）は、「僕」が読者に処女作が崇ったことを告白する文章としてのみならず、元恋人に処女作の崇りを及ぼす文章としても読めるようになっていく。その二つの解釈が、相異なるレベルでの虚実の往還を伴うために、「僕」の魔力は完全な否定も肯定も不可能な存在感を帯びている。

**第三章 「受け手としての作者——「十六歳の日記」**では、作者の少年期を複雑な構成で描く「十六歳の日記」（一九二五）が、他者もしくはかつての自己の言葉の受け手としての作者の隠蔽と露出を繰り返して、重層的なりアリティを生んでいることを指摘した。一六歳の時の日記の部分は、祖父や祖父を介護する女性の発言を聞き取る「私」を多くの箇所です省略しつつ、「私」の身体の動揺をしばしば指示する

ことにより、発言がもたらす情動を読者に想像させている。そして小説全体は、終盤まで後景化した日記の読み手としての作者を、最後の日記への解説で遡及的に前景化して、作者が日記に呼び起こされる分節不可能な感情を、読者に思い描かせている。そのように作者の感情を、それぞれ非常に多義的な二つの層を持つものとして読者に伝達することで、自己に応答を求め続ける圧倒的な他者として祖父が表象されている。

**第四章 「鏡としての「私」——「浅草紅団」**では、新聞・雑誌で連載され、川端の出世作となった長編「浅草紅団」（一九二九―三〇）が、前半においては語る「私」と語られる「私」の間の距離、後半においては書く「私」と「私」以外の人物の間の距離を様々に変え、自らの身体を商品とする女性たちの苦しみや、「底の知れない」ものとして描いていることを明らかにした。前半において語る「私」と語られる「私」の間の距離を、言葉によって指示していたのも書き手の「私」とみなすなら、書き手の「私」は一貫して地の文と会話部分の間や複数の挿話の間を架橋し、重層的な解釈へ読者を導くことにより、通俗性と批評性を両立させていたと言える。そうして読者に分裂を強いる作者（書き手）の働きは、映画との関与を通して発見されたと考えられるとともに、物語を規定する鏡に象徴されながら、敗戦後の小説にまで継承されると思われる。

**第五章 「彼」という空白——「禽獣」**では、「雪国」との繋がりが

が指摘されてきた「禽獣」（一九三三）が、地の文の多くを「彼」の  
声で語られたものとして読ませつつ、「彼」が想起したこととしな  
ったかもしれないことの微妙な差異を作り出し、心中という出来事  
の重みとその後流れた時間の重みを、二つながら相乗的に示して  
いることを述べた。読者は「彼」に同一化して、人間との結婚と動物  
の愛玩のみならず心中を結びつける歪な感性を身につける一方、小  
説全体の構成や女中の発言に導かれ、必ずしも自覚されていない「彼」  
の千花子や動物たちへの暴力を理解することになる。読書で得られ  
た認識がそこに代入されると同時にそれとともに相対化される、そ  
うした行為に先立った実体を持たない特殊な「彼」を、本論文は一度  
も描写されない鏡が決定的な機能を果たしていることを踏まえ、読  
者の鏡像と位置づけた。

**第六章 「鏡の中で響く声——「雪国」**では、代表作の「雪国」（一  
九三五―四七）が、島村を読者の鏡像として、女への応答の必要性と  
その完遂の不可能性の間で読者を引き裂くことを、一九四八年に創  
元社から刊行された決定版から明らかにした。島村の認識の反映と  
捉えられてきた地の文は、実際は作中の鏡のように読者の視線を屈  
折させて、島村の感動や官能と、その条件をなす女との非対称な関  
係を合わせて読者に伝達している。女が物語世界において島村に向  
ける発言、特に島村の発言や地の文と同じ語を含む発言は、そうし  
た地の文とかかわることで、読者が小説を新たな姿勢で解釈し直す

契機となる。とりわけ、強いまなざしを伴う女たちの声や、駒子と葉  
子が互いについて語る言葉が島村の身体を揺り動かすさまは、女を  
観賞や性愛の対象とみなすことをやめ、女たちが語ろうとする女た  
ちのあり方を想像するよう読者を促す。

**第七章 「焼かれることに抗う文字——「千羽鶴」と「波千鳥」**では、  
「千羽鶴」（一九四九―五一）の続編として発表された「波千鳥」（一  
九五三―五四）が、前編の筋に底流していた、世代をまたぐ女性嫌悪  
に、主人公の菊治が向き合う未来を指示していることを論じた。「波  
千鳥」の地の文は、ちか子のあざに呪われた物語現在の菊治の像を  
読者に思い描かせながら、読者が描き直せるような曖昧な像に留め  
ている。同時に、文字の手紙から菊治への「別れ」と異なる意味、す  
なわち菊治がちか子のあざに呪われるという物語を深奥において規  
定していた父の欺瞞と暴力を、「今」の菊治の無意識に刻まれている  
ものとして引き出すように読者を誘う。あざに魔力を見出すことの  
暴力性が手紙から強く理解されているほど、書く最中の文字の涙と  
読後の菊治の手のふるえは大きく見積もられることになり、したが  
ってまた文字の手紙の多くが焼かずに残されて、菊治の女性たちへ  
の態度を変える未来が想像される。

**第八章 「近づくことで嗅がれる匂い——「眠れる美女」**では、裸で  
眠る少女との一夜を老人に供する娼家を舞台とする「眠れる美女」  
（一九六〇―六一）が、江口の女性への暴力の内実を読者の理解に

委ね、江口と女性双方の身体をより生々しく描いていることを述べた。同作は女将の発言を含む物語の展開により、性器の入り口と処女膜という二つの境界に江口を出会わせ、女体に厚みを持たせると同時に、呼称の使い分けにより、有能かつ〈不能〉という江口の身体の両義的性格を際立たせている。江口の〈不能〉と有能は、それぞれ女体の内部に残る痕跡へのこだわりと、女体の表面を拡張する能力と捉えることができ、第五夜における女性の死は、二つの交錯が引き起こす江口の殺人と位置づけられる。頻りに書かれる女性の匂いは、そうした殺人のみならず、江口の次なる暴力を、〈不能〉と有能どちらに由来するかを確定しないまま、強くほめかしている。

**第九章 「欠視」がもたらす肌触り——「たんぽぽ」**では、最後の長編「たんぽぽ」（一九六四―六八）が、地の文がその声で読まれる作中人物を曖昧にして、複数の主体の経験を糾合したリアリティを生んでいることを指摘した。稲子が父の墜死を「欠視」あるいは幻視する場面では、作者と稲子の距離の揺らぎと多様な文末・語末を通じて、視覚以外の感覚と記憶によって増幅された恐怖が表現されている。さらに、その墜死のさまが、稲子の母や恋人の久野の声で語られていた可能性が事後的に作り出されることにより、稲子の言葉が事物に与えた存在感が示されている。母の手のひらに蘇る不在の稲子の肌触りは、母の言葉と身体のあるりようの対応に注目すれば、そうして言葉が事物に与える存在感のみならず、作中人物の身体をしば

しば「欠視」する文体、すなわち主語を柔軟に出し入れできる日本語の小説がもたらすリアリティの典型と解釈できるだろう。

**「おわりに——声の論理に基づいて否定性を生み出す作者へ」**では、以上の議論を総括したうえで、今後の研究の展望を示した。何をいつどのような声で語るかを選ぶ行為者としての川端は、ある人物と同様に他者の言葉や身体に触れ、自らの読む身体を揺り動かされることを契機に、誰か一人の声によっては決して語り得ないだろう、間主観的な認識を織りなしてゆくことを、読者に求めていると言える。そうした論理と感覚の双方を巻き込む否定の力は、冷戦期のカノン化により抑圧されてきたと同時に、現代文学に密かに継承されているのではないか。川端の小説を典型として取り上げることで明らかにした、声の論理の働きを分析の射程に含めれば、日本語の小説一般、特に戦間期以後の小説を、資本主義や帝国主義への関与の歴史を直視しながら、読み継いでゆけると思われる。